

日本人と国際結婚したフィリピン人女性が抱える問題—インタビュー調査を用いて—

早川 武志 山崎 瑞紀

日本人と国際結婚をしたフィリピン出身の女性 10 名を対象にインタビュー調査を実施した。全体として日本での生活に満足している者が多く、深刻な内容は少なかった。結婚生活をする上でどのような問題を感じているか、について検討し、整理したところ、「言語」「家族よりも仕事を重視」「日本人の消極的な性格」「貸借関係の感覚」「伝統・慣習」の主に 5 つに分類された。「家族重視—仕事重視」といった価値観、「核家族—拡大家族」といった家族のあり方、「消極的（抑制的）—積極的」な対人行動パターン、といった文化の違いが国際結婚夫婦に葛藤を生じさせる可能性が示唆された。

キーワード：国際結婚、フィリピン、異文化適応、葛藤、価値観

1 研究目的

1980 年代後半以降、在日外国人が急増し、国際結婚も多くみられるようになった。日本国内における日本人の国際結婚件数は 2006 年に 44,701 件（婚姻総数の 6%）と最多を記録した。その後は年々減少傾向にあるものの、2013 年は 21,488 件、婚姻総数の 3% が国際結婚となっている（厚生労働省, 2014）。そのうち夫が日本人で妻が外国人の割合が 72% と多く、妻の国籍はフィリピン（20%）が中国（40%）に続き、2 番目に多い。

異なる文化的背景を持つ夫と妻との結婚によって形成された家族は、地域社会に多様な文化を持ち込む存在と言え、外国人妻たちは多文化共生社会を目指す今後の日本において重要な役割を果たすと考えられる（桑山, 1995；平野（小原）, 2000）。しかしながら言語や習慣の違う者同士が結婚生活を営んでいく過程ではさまざまな困難や葛藤が顕在化し、ストレスを抱えるなかで家庭崩壊、離婚という問題を生じさせる危険もある（松本, 2001）。

関東地方 5 県における 12 教会に出席しているフィリピン人 101 名を対象とした質問紙調査の結果では、日本人の配偶者を持つ者はフィリピン人同士で結婚している者より日本語能力が高く、日本におけるソーシャル・サポートを多く得ているなど生活適応を促進させる

ための条件がよいものの、仕事環境や居住環境、レジャーなどの生活満足度はより低いことが見出されている（平野（小原）, 2000）。また松本（2001）は、関東・中部地方の 1 都 6 県、及び名古屋市の教会や団体を通して日本人配偶者を持つフィリピン人女性 135 名を対象に質問紙調査を行い、家族内での孤独感・孤立感を「いつも感じる」者が 31%、夫との生活を「とても不安」に思う者が 25% おり、孤独感が高いほど生活上のストレスも高いこと、夫への要望としては、「育児・養育への協力」を要望する妻が 86% を占めているほか、夫との「共有時間をもっと多くもつ」（82%）、「宗教への理解」（77%）、「母国家族との交流」（76%）の要望が高いことを報告している。さらに、佐竹・ダアノイ（2006）は、フィリピン女性と日本人男性の国際結婚の社会的・歴史的背景や結婚によって生じる女性側、及び男性側の意識の変化、子どもの教育上の問題などについて事例を挙げて報告している。

こうした研究を積み重ね、国際結婚をしたフィリピン人女性がどのような経験をし、どのような意識を持っているか、を知ることは、人々の異文化理解を促し、異文化で暮らす人々へのサポートのあり方を再考する機会にもなる。

そこで本研究では、日本人男性と国際結婚をしたフィリピン人女性を対象にインタビュー調査を行い、結婚生活をどのように感じているか、どのような問題があるかを検討し、異文化理解の手掛かりとしたい。

2 方法

2.1 被面接者

日本人男性と結婚しているフィリピン出身の女性 10

HAYAKAWA Takeshi

東京都市大学 環境情報学部 情報メディア学科 2014 年度卒業生

YAMAZAKI Mizuki

東京都市大学 メディア情報学部 社会メディア学科 准教授

名（出身地域はマニラ7名，その他3名）．年齢は30歳代1名以外は全員40歳代であり，滞日期間は10～25年だった．恋愛結婚は7名，お見合い結婚は3名と，恋愛結婚をした者のほうが多かった．全員キリスト教徒である．

2. 2 質問項目

(1) 来日のきっかけや目的，(2) 配偶者と知り合ったきっかけ（お見合い結婚か，恋愛結婚か），(3) 国際結婚をしてこれまでに何か気になったことはあるか，の主に3点について尋ねた．

2. 3 実施時期・手続き

2014年10月～12月，横浜市にある，フィリピン人向けの礼拝がある教会の出席者を中心に被面接者を探したほか，被面接者にも他の対象者を紹介してもらった．インタビューは，第一著者が半構造化面接を用いて個別に実施した．インタビュー時間は1人あたり30分程度である．インタビュー内容は被面接者の同意を得て録音され，テープ起こしを行ったうえで分析した．

3 結果

3. 1 来日のきっかけ，目的

「家族のために出稼ぎに来た」と回答した者が10名中7名であり，残り3名は結婚生活（お見合い結婚）のために来日していた．当時は3日ほどでビザを取得することができ，日本はバブルの時代で，3日間という短期間でフィリピンの1カ月の労働賃金を稼ぐことが出来た等が主な理由だった（「日本だと2日後にはビザが下りたから，いまでは1カ月かかるけどね，もともとは遊びに来ていて，日本には当時仕事がいっぱいあって，だから最初は2週間だけのつもりがだんだん延びてしまった (No.2)」）．

お見合い結婚をした者も「家族を助けるために結婚をした」と述べていた．「家族を助けるため，フィリピンでは仕事を探して海外に行く．言い過ぎかもしれないが，フィリピンでは結婚も仕事の一つという意識がある．今の夫と全く恋愛感情がなく結婚したわけではないが，私の中では仕事という意識は少しあった (No.1)」と述べる者もいた．また，「家族を助けるため，もともとは資格があり，サウジアラビアで助産師をしていた．アメリカに行きたい思いがあったが，友人に勧められて日本人とお見合いをすることにした．サウジアラビアの一カ月の賃金は当時の日本では3日で稼げたから (No.3)」のように，専門的な資格を持っていながら来日した者も10名中2名いた．

3. 2 配偶者と知り合ったきっかけ

クラブや居酒屋で店員と客の関係として知り合った者が4名，お見合い結婚3名，知人からの紹介3名だった．クラブで知り合って結婚した理由としては「ビザ取得のためもある」と答えた者もいた（「クラブのお客さんとして来てた．貧乏だけどすごい良い人だったから結婚しちゃった．ビザをとりたい思いもあったし (No.6)」）「それで子どもはフィリピンに置いて，子どものためにまた日本に来てクラブで働いたときに出会った．もちろん好きになったんだけど，少しはビザのためについていうのもあって・・・ (No.7)」．また，お見合いでは女性側が優先的に男性側の様々なデータを見て相手を選ぶことができ，フィリピンでお見合いを行い，費用は男性が全て負担していたということだった．

3. 3 国際結婚をしてこれまでに気になったこと

被面接者の滞日期間は全員10年以上と長く，全体として日本での生活に現在満足している者が多かった．来日してから現在までの内容としてインタビューで多く聞かれたものは，「言語」「家族と仕事への態度」「日本人の消極的な性格」だった．また各1件であるが，特徴的な内容として「貸借関係の感覚」「伝統・慣習」があった．順に報告する．

(1) 言語

ほとんどの者が日本語学校での日本語学習の経験はなく，日本語での会話はある程度できるが，漢字が含まれる読み書きは難しいレベルだった．言語の違いについては感情等，目に見えないものを伝えるのが難しいという意見が多かった（「言葉がわからないときは大変だった．いまでも大変．目に見える物は簡単だが，心の中の感情とかはうまく相手に伝えられなくて．また，どうしても命令口調になってしまうから，相手に悪い思いをさせてしまうこともある．それが原因で喧嘩してしまうこともある．そういう時はなんで怒っているかわからないから大変 (No.4)」）「辞書で調べて話すけど，辞書の日本語って固いでしょ？だからどうしても固い感じになったり，命令口調になったりして，本来はそんなつもりがないのに主人が勘違いをして言い争ってしまうことはいっぱいあった (No.8)」．日本語力不足のために子どもの教育で苦労したという話も聞かれた（「小学校とか連絡帳？とか何書いてあるかわからなくて，一回も出したことがない・・・ (中略)・・・また，日本の進学のシステムがわからなかったから，息子には何もサポートしてあげられなかった (No.4)」）．

(2) 家族と仕事への態度

家族については，夫の親や兄弟に対する夫自身の接し

方が冷たいという不満が述べられていた。例えばNo.6は以下のように述べている。「日本人は自分の親とか兄弟に冷たい感じがする。私には優しいんだけどね。結婚したら、もうあなたとは家族じゃありません、みたいな。おじいちゃんと一緒に暮らしていたが、喧嘩ばかりで冷たいし。また、兄弟がいるんだけどお金のトラブルで喧嘩しちゃって全然話していない。兄弟だからお金ぐらい貸すんじゃないかってあげちゃえばいいのよ。お金のせいで大事な家族を失うなんてばかみたい。それで、家も出て2人で暮らしているが、おじいちゃんがすごい心配・・・(中略)・・・日本人は自分という中に家族というカテゴリーがある感じがする。フィリピンでは家族のカテゴリーの中に自分がある感じ。だから私が兄弟とかおじいちゃんのこと怒るけど、向こうはなんで怒っているのかわかっていない。俺のことだから心配するなって」。またNo.4は「日本人は家族に冷たい。旦那は3人兄弟で、奥さんが中国人と日本人と私フィリピン人ですすごい国際的な。私たちはすごい盛り上がりしているのに、男兄弟はずっと黙ってばかり。態度も冷たい。家族なのにどうしてあんなに冷たくできるのかわからない」と述べている。

妻と子どもを最優先、次に自分の親や妻側の家族、という優先順位を付けている夫に対して、自分たち(妻と子ども)だけが大切にされればよいのではなく、家族全体を大切にすべきと考えていた。

またそれに関連して、自分自身の家族への仕送りに関して、No.1は「家族を助けるのは当たり前の考えだと私は思っている。だから、仕送りをしすぎて怒られる意味が私にはわからない。日本には老人ホームがあるがそれもよくわからない。家族の世話をするのは普通は家族じゃないのか？日本人は家族を大切にしないと感じてしまう」と日本人の家族への態度に疑問を感じていた。

家族への態度に関連して、夫が家族よりも仕事を優先することに対する違和感が述べられていた(「日本人は家族よりも仕事が大事。私は生きるために仕事をしているが、日本人は仕事をするために生きていくという感じ。だから、子育てや家事を私に任せっぱなし。それで揉めることはあった(No.1)」、「家に帰っても仕事仕事うるさい。働きすぎというか、仕事を大事にしすぎている。もっと家族に目を向けてほしい。最近では子育てのことで喧嘩することが多くて、旦那は子どもの好きなようにと言っているが私にはそれが家族に対して無関心なのだと感じてしまう(No.4)」。

(3) 日本人の消極的な性格

日本人の夫の消極的、抑制的な姿勢についての不満も言及されていた(「普段から無口な人だから何も声を掛けてくれなくて・・・(中略)・・・助けてといえれば助け

てくれるが、何も言わなければ何もしてくれないから大変だった(No.3)」、「旦那は確かに優しいけど、私が言わないと何もしてくれないの。何でやってくれないの？って言ったらずうして欲しいかどうか悩んでたって言うの。おかしいでしょ？その人のためだと思つたらすぐやってあげるのが当たり前。相手がそうして欲しくないかもしれないとか関係ない(No.10)」。

またフィリピンでは男性が女性に対してもっとロマンティックに積極的に働きかけるということで、日本人の夫にもそのような態度を望む声もあった(「フィリピンはもっとロマンティック。男が女に尽くしてくれるけど、日本では男が偉そう。前を歩いて手もつないでくれないし、荷物を持ってくれないかたりして・・・。だから息子にはロマンティックな男になるように育てたよ(笑)。フィリピンではお金がないから愛情を表現するにはこういう態度で示さないといけない。何も買ってあげられないからね(No.3)」、「もうちょっとロマンティックになってほしいかな。考えが現実的すぎ。あと歩くときは合わせてほしい(No.2)」。

フィリピンでは宗教上の理由から離婚は一般的に認められていない。そのせいかフィリピン人女性は結婚に対して慎重になり、男性側の積極的なアプローチが主体になるという。現在では都会ではあまり見かけないが、男性が好きな女性の家の前でラブソングを歌わなければ結婚出来ない「ハラナ」という伝統文化もある。

しかし、全体として現在では大きな不満や要望はなく、前述したNo.10は「最初それでこの人は冷たい人なんだなって思った。でも違うのね。日本人は全員シャイなだけ・・・(中略)・・・最初は『もっとアピールして！』って思っていたけど、相手の気持ちを汲み取ってあげるのも優しさ、ってわかったから。たぶんフィリピン人の友達みんな最初はそれで大変だったと思う。私もそうだった。それで、友達に相談すると笑いながら『日本人なのよ』って。最初はわけわからなかったけど、今ならわかる」と述べ、初めは疑問に感じていた日本人夫の消極的傾向や曖昧さを一つの良い部分として受け入れていた。

(4) 貸借関係の感覚

「(2) 家族と仕事への態度」の項でNo.6が「兄弟だからお金ぐらい貸すんじゃないかってあげちゃえばいいのよ。お金のせいで大事な家族を失うなんてばかみたい。」と述べていた例を報告した。妻の実家への仕送りについて尋ねたときにNo.1が示唆に富む発言をしていた。「フィリピンでは困っている人がいれば助け、自分が困った状況になれば助けを呼ぶのが普通。しかし、日本人は“借り”を考えすぎている。だから、助けてほしい時に助けを呼ばないし、助けた時も必ず『返して』という。変な

プライドみたいなのが日本人にはある。それで、日本人は冷たいと感じることもあった。フィリピンではそういうことはない。お金にしても、貸すではなく、あげる。私が日本に来るのも、もちろん国の助けはあったが、友人や親戚からお金をもらって来られた。そのお金を返すという考えはないし、向こうも何も考えていないだろう。助けたことは神様が知っている。だから、神様がその分を返してくれると思っている。日本人は無神論者で目に見えるものしか信じない。そういったところでも“借り”が大事になってくるのだろう。そういう意識の違いで確かに金銭で揉めることはある」(No.1)。

(5) 伝統・慣習

フィリピンでは様々な行事をパーティーのように楽しむことが多いため、お葬式での重々しい雰囲気がつらいという者が1名いた(「お葬式はつらかった。お経をただ座って聞くのもつらいし、あの重々しい雰囲気も辛い。(フィリピンでは)お葬式は楽しくやるのが基本。あんな悲しい式をして、死んだ人は余計心配してしまうのでは?」(No.1))。

4 考察

日本人男性と結婚したフィリピン人女性にインタビューした結果、「日本人は家族よりも仕事を大切にしている」という不満を複数の者が持っていた。これらは外で働く夫と家庭を守る妻の葛藤というだけでなく、家族重視のフィリピン(佐竹・ダアノイ, 2006)と仕事重視の日本の価値観による葛藤とも解釈できる。また夫の親や兄弟に対する夫自身の振る舞いを冷たいとフィリピン出身の妻が感じる背景には、日本では核家族的傾向が強いのに対し、フィリピンにおける家族形態の主流は拡大家族であるといった家族のあり方の違い(佐竹・ダアノイ, 2006)が関係している可能性がある。被面接者の来日の理由は仕事のためであっても結婚のためであっても、全員が「家族のため」と回答しており、家族を大切に思っている移住者だからこそその疑問や不満とも考えられる。

フィリピン出身の妻が実家に行く仕送りは日本人にとっては馴染みのないことであり、夫の理解が得られないこともある。また、夫の兄弟が夫から借りたお金を返さないために両者の関係が悪くなっていることに対して、No.6は「兄弟だからお金ぐらい貸すんじゃないかってあげちゃえばいいのよ。お金のせいで大事な家族を失うなんてばかみたい」と述べていた。日本では世帯が別であれば、「兄弟であっても貸したお金は返してもらおうもの」と考えるのが一般的だが、No.1もまた「日本人は“借り”を考えすぎている。だから、助けてほしい時に助けを呼ばないし、助けた時も必ず『返して』という。フィ

リピンではそういうことはない。お金にしても、貸すではなく、あげる。私が日本に来るのも、友人や親戚からお金をもらって来られた。そのお金を返すという考えはないし、向こうも何も考えていないだろう。助けたことは神様が知っている。だから、神様がその分を返してくれると思っている」と述べており、日本とフィリピンでは貸借関係の感覚の異なる可能性がある。フィリピンは人口の90%以上がキリスト教徒であり、本研究の被面接者もすべてカトリック教徒である。「神様がみている」という信念が貸借関係の感覚に差異をもたらしている可能性もある。しかしながら、貸借関係に関する内容は2名のみによる言及であるため、フィリピンにおける対人関係上のルールや意識としてよく見られるものかについては更なる検討が必要だろう。

本研究における被面接者は日本語学校で専門的に日本語を学んだ経験はなく、日本語力不足のために夫や周囲の人々とのコミュニケーションに苦勞することがあると述べていた。夫側が気を配り積極的に関与するようにすれば良いが、家庭での日本人男性の態度は消極的であり仕事を優先することが多く、そこで妻たちは葛藤するようだ。日本とフィリピンでは理想の男性像が異なり、日本では無口な男性の評価も高いが、フィリピンでは積極的な男性が好まれるという。しかし、日本での経験を重ねるうちにそうした消極的な態度にも良い面があると思うようになり、異なる文化のやり方を受け入れるようになっていた。

本研究でのインタビューは1件あたりの時間が短く、人数も多いとは言えないため、十分な情報を得られていない部分もある。また妻のみを対象としており、夫側への調査を行っていないという限界もある。仕事や家族への態度を含めた価値観、家族を含めた対人関係のあり方や貸借関係の意識、などにおけるフィリピンと日本間での相違点や共通点については調査対象者を増やし、実証的に検討する必要があるだろう。また、それらが国際結婚をした夫婦にどのような影響を与えているのか、についての更なる検討も今後の課題として残された。

参考文献

- [1] 平野(小原)裕子(2000) 在日フィリピン人の日本社会における生活適応に関する研究—配偶者の国籍別比較から—九州大学医療技術短期大学部紀要, 27, 83-88.
- [2] 厚生労働省人口動態統計年報(2013年) <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001127023> (2014年2月28日)
- [3] 桑山紀彦(1995) 国際結婚とストレス—アジアからの花嫁と変容するニッポンの家族— 明石書店

- [4] 松本佑子 (2001) 国際結婚における夫婦関係に関する一考察—フィリピン妻の意識を中心に— 聖徳大学研究紀要 (人文学部), 12, 17-22.
- [5] 佐竹眞明・ダアノイ, M. A. (2006) フィリピン—日本国際結婚—移住と多文化共生 めこん